

先人の知恵から

24

かうんせりんぐるうむ かかし

河 岸 由 里 子

時代が令和になった。昭和、平成、そして令和と時代は変わっても変わらないもの。そういうものは、信じられるように思う。

まだ「か行」が終わらないが、少しずつ進めて行きたい。今回は「け」の列から次の六つを紹介する。

- 芸は身を助ける
- 煙る座敷には居られるが、
睨む座敷には居られぬ
- 蹴る馬も乗り手次第
- 毛を慎みて貌を失う
- 喧嘩両成敗
- 消消塞がざれば終に江河となる

<芸は身を助ける>

身についた芸芸があれば、時には暮らしの助けになったり、思いがけず役に立ったりとすること。「芸が身を助ける」ともいう。 出典 江戸いろはがるた

子育て中の保護者の相談にのっていると、時々聞かれるのが、「うちの子〇〇だけは上手なのだけど、こんな事が出来ても何の役にも立たないですよ。それよりやはりしっかりと成績をとって欲しないと・・・。」という言葉である。〇〇は色々である。ある進学校の男子高校生では、〇〇は「お菓子を作り」であった。いくらお菓子作りが得意でも、それがそのまま、有名大学への進学に結びつくわけではないだろう。しかし、何がその子を助けるかは分からない。実際その子は、人間関係があまり得意ではなく、人とコミュニケーションをとる取り方に悩んでいた。そこで、得意なお菓子作りを生かして、たまたま近かったバレンタインにクラス全員にクッキーを焼いてみたらと提案したところ、本人は喜んでクッキーをたくさん焼いて持っていったそう。その結果それをきっかけに、クラスの子どもたちとやり取りができるようになり、その子に笑顔が増えた。

人間何かしら得意なものはある。それが世間一般では決してプラスに捉えられていなくてもである。

趣味が高じて仕事となり、それで大成功となることもある今の時代、どんなことでも得意技は大事にすべきだろう。親にとってはくだらないと思うようなことであっても、子どもが好きで、楽しんでいるのであれば、それはそれで良いのではないだろうか？それが将来役に立つかどうかのみの判断で、子どもの楽しみを奪ってはいは、将来への夢や希望も失ってしまうかも知れないのである。手先が器用、絵が得意、歌が上手い、楽器が得意、読書が大好き、料理が好き、編み物が好き、おしゃべりが好き、物を集めるのが好き、昆虫が好き、動物が好き、人を笑わすのが好き、等々。好きなことは続けていれば得意技になるだろう。そしてそれが、何かの時に役立つことは多々ある。

「くだらないから辞めなさい。」「そんなものでは食べていけない。」などと大人の常識で判断するのではなく、子どもの自由な発想や判断で、好きなことを好きなだけさせてあげることで、もしかしたら、親の及びもつかない成功に結び付くのかもかもしれないのである。子どもには無限の可能性がある。大きな目で見守っていくことが大事ではないか。

英語では・・・

An occupation is as good as land. (職業は土地に匹敵する。)

＜煙る座敷には居られるが、睨む座敷には居られぬ＞

煙たいところにいることはできても、細かい動作まで意地悪く監視されている所には居られないということ。「煙る家には居られるが、睨む家には居られぬともいう。

この諺は、子どもの一挙手一投足を見張っているような保護者に使うことが多い。

子どものことで相談を受けていると、よくそんな細かいところまで見ていると思うほど、子どもの行動を観察して報告してくれる保護者にであらう。

例えば、子ども同士が遊んでいる時に、ずーっと観察していて、「お友達がこうしたら、うちの子がこんなことをして、そうしたらこうなって……。こんなだからお友達と上手くいかないのだと思う。コミュニケーションが下手なんだから。きっと発達障害だね。」などと言って来る。しかし、子どもたちはその時の気分でも色々なことになる。もめたり仲良く遊べたり。別におしゃべりが無いからコミュニケーションが取れないなどと決め込む必要もないのだが、不安が強いからか、ずーっと観察しては、気になる場所を探す。気になる場所を探せば、誰でもいくつも見つかるものである。

こちらから「しっかり見ていてほしい」と依頼する場合があるが、それは普段あまりにも見ていない保護者に対してのもので、むしろ見過ぎている保護者の方が多い。

子どものことが大切で気になるのは分かるが、少し目をそらせてくれても良いのに、ずっとジューッと見られていたら、誰でも辛くなるだろう。自分が見られる立場だった

らどう感じるのか、考えてみればわかるの
だろうが、心配で心配で仕方がないと訴え
る。

不安症と言え言えないことも無いほど
の心配ぶりである。こうなったらどうしよ
う、ああなったらどうしようと思えば思う
ほど、ジ——ッと子どもを見張ってしま
うのである。ご自身で「心配し過ぎですよ
ね。」と笑いながらも、やはり止められない。

そんな保護者には、どこまで許容でき
るのかを一緒に検討してもらいながら、許容
範囲を少しずつ広げていくようにして居る
が、その際に、睨むより、煙たいくらいに
していこうという意味でこの諺を使ってい
る。

昔から「悪い虫がつかないように」しっ
かり見張る保護者はいるが、悪い虫も良い
虫も、ついてみないとわからないし、それ
が悪いかどうかの判断はその時代時代でも
多少の違いがある。どうしても保護者は古
い価値観に囚われていて、中々今の時代
について行けない。変わらぬ法律や規則を
もとに良い悪いの判断をしているならまだ
しも、ファッションなどは判断基準がない
し、言葉使いも造語など判断のしようも
ないだろう。

少しおおらかに、子どもたちを見守っ
ていきたいものである。

<蹴る馬も乗り手次第>

暴れる馬でも、乗り手によってはおとな
しくなるということ。転じて、扱いにくい
物でも、上手く扱う方法はそれなりにある
ということ。

子育て中の親にとって大変なのは、泣き
止まない子、暴れる子、言うことを聞か
ない子、食べない子、寝ない子などである。
母親がイライラして怒鳴ったり叩いたりし
てしまうことさえある。子育ては、中々大
変な仕事である。

しかし、どんな子でも扱い方がある。泣
き止まない子と言っても一生泣いているわ
けではない。過敏な子なのかもしれない。
暑がりなのかもしれない。色々試してい
るうち、子どもも成長し、泣き止む。暴
れる子や噛みつく子、髪の毛を引っ張る
子や押す子などは、言葉でのやり取りが
可能になれば変わってくる。食べない子
もいずれ食べるようになる。

親が子どもと向き合いながら、根気強
く関わって行けば、子どもは変わって
くる。待ってあげることが一番大事だ
ろう。しかし今どうするかが親にとって
問題である。

子育てに困っている今を何とかしたい
親の気持ちもわかるので、この諺を伝
え、一緒に方法を考え、色々試してみ
るお手伝いをしていく。親が一番子
どものことを知っているのだから、
その方法を親が気づけるとよいな
といつも思いながら。

<毛を慎みて^{かたち}貌を失う>

小さなことにこだわって、根本を忘
れることのとえ。絵を描くものが、一
本一本の毛髪を丁寧に描き過ぎて、
全体の容貌が似ていないものにな
ってしまう意から。「毛を慎んで
貌を失う」ともいう。出典には、
「^{えが}画く者は毛を慎みて貌を失い、
^{その}射る者は小を^{すわ}儀んで大を^{すわ}遣る
(弓を射る者は的野小さな点ばかり
を狙って、大きな部分に目が

行かない」とある。 出典 淮南子 意。

この諺は「木を見て森を見ず」とも似ている。小さなことにこだわって全体を見失ったり、全体の形が変わってしまったりするということである。

子育てでは、特に、学校に上がってからだろうが、ついつい点数に拘ってしまう親が多くなる。

何点だったかが大事なのではなく、何を理解し何が理解できていないかを知ることが大事なのだが、親も先生方も、点数で子どもを凶ろうとしてしまう。たまたま○を付けたものがあっていれば、点数はそれなりの点数になる。ただ適当に○を付けたのか、理解して○を付けたのかは大きな違いであろう。

お習字などでも、「この払いが大事」と言われると、一生懸命「払い」に注意が向き、全体のバランスが崩れてしまうこともある。

母親たちの相談でも、子どものちょっとした癖や行動に拘り、そこばかりをつつくことで、子どもの全体が崩れてしまうことが度々ある。

人間は不完全な生き物である。小さいことを完璧にさせようとするのではなく、全体としてまあまあと思えるように育てていけることが、子育てでは重要である。その為にも、子どもの小さい欠点ばかりに目を留めず、全体としてどうかを常に心において子育てをしていくべきではないだろうか。

<喧嘩両成敗>

喧嘩をした者はどちらも悪いとして、両方とも同じように罰すること。成敗=処罰の

この諺は広く知られていると思う。兄弟げんかなどでも良く母親がこの諺を言って、喧嘩した双方を叱っているのを見る。

それならばよいのだが、兄や姉ばかりが叱られることも多い。兄や姉は大きいのだから我慢しなさいと言われる。でも弟や妹の方が悪いことも多い。兄や姉は我慢をするか、弟や妹にやり返して泣かせ、親から叱られる。この繰り返しの中で、弟や妹に対して、酷い憎しみを持ってしまう子もいる。

喧嘩はどんな兄弟にも起こる。喧嘩をすることも人と付き合う練習になる。問題は、その時の対処の仕方である。喧嘩があって、双方の事情を聴くと、大抵自分の悪いところは言わず、相手の悪いところばかりをあげつらう。それは兄弟ではなく、夫婦でも一般の大人同士の喧嘩でも変わらない。どちらの言い分が正しいかは中々判断できないだろう。客観的に観察していた人がいれば話は別であるが、一般的に兄弟喧嘩や夫婦喧嘩に対し、そんな風に外で客観的に見ている人はいないのが普通だろう。そうであれば、喧嘩両成敗として、お互い様にするしかない。但し、その場合に、そこで終わってしまうのではなく、今後どうしたらよいかを考えさせることが大切だろう。

喧嘩は一人ではできない。相手がいるからできる。喧嘩を出来る相手がいることも幸いなことかもしれないと伝えつつ、双方に喧嘩に至る理由があり、原因があったとし、今後は喧嘩に至らないための工夫を考えられれば良いと思う。

＜涓涓塞がざれば終に江河となる＞

水は小さな流れのうちにせき止めないと、しまいには大きな川となってしまうということ。転じて、わざわざは、小さなうちに断ち切らなければ、大事に至ることのたとえ。涓涓＝小川などの水がちょろちょろ流れる様。江河＝揚子江と黄河。大河の意。
出典 孔子家語

働いていてもいなくても、子育て中は本当に忙しいし大変である。一日中子どもを見ている日々は煮詰まりやすいし疲れやすい。疲れてくれば、子どもに細かく対応することが難しくなる。そういう時に限って、子どもはちょっとした大事な行動をとり、それを理解してくれたかどうか、まるで親を試すようなことがある。そして、それを理解してもらえていないと感じると、親に対して、マイナスの行動を繰り返し、どんどん親子の関係性が悪くなってしまう。

親子関係が悪くなるきっかけは、本当に小さなことである場合が多い。兄弟で兄だけを大事にしたと弟の方が思い込んでいたり、妹ばかり可愛がったと姉の方が恨んでいたりと、そんな話をたくさん聞く。そしてずっと親を憎んでいたと。本当に酷い兄弟間差別を行っていたケースも勿論あるが、親としてはそんなつもりは一切なかったのにというケースもある。

もつれた糸は中々元に戻らない。それどころかどんどんもつれてしまうこともある。そんなもつれも、早いうちに手を打ってほどこけば、それ以上複雑にこじれることはない。出来るだけ早く、ちょっとしたかけ違いやもつれに気づき、手を打つことができれば、大きなほころびやもつれになること

はないだろう。

人間関係ではこういうことが多々ある。何か起きたときに話していれば、話し合っていれば、とっくに解決していたことが、その時点で話せなかったためにややこしいことになる。

例えば、間違っただけをしてしまったと思ったら、直ぐに謝った方が良いのだが、謝りそこなうことで、関係性は悪化するだろう。相手が勘違いをしているなど思ったときも、その時点で一言言ってあげれば、双方の関係もそれ以上間違っただけに進まなくて済む。気づいたときに直ぐ実行することが大事なのだと思う。

問題は小さいうちに片づける方が良くと伝える意味で、この諺を使うことがある。

出典説明

孔子家語^{こうしけご}・・・十卷四十四編

孔子の言行や門人たちとの問答・議論などを集録した書。『漢書』芸文子に「孔子家語二十七卷」とあるが、著者名がなく、書も現存しない。現存するのは三国時代の魏の王肅の偽作で『左伝』『国語』『孟子』『荀子』『礼記』『史記』などの古書から孔子に関する記事を集めたものとされる。